
第 23 章 息子アブベクルのこと (前編) : 1974 年～1975 年 (37 歳～38 歳)

善意の人、ハンス医師

1970 年代初頭のこと、アウレフに一つ嬉しい出来事があった。スイス人医師のハンス・エルザム (Hans Ehrsam) さんが、アウレフの病院に着任したのだ。彼は、病気や怪我で苦しむアウレフの人たちのために、自ら買って出てここの病院で働くことに決めた。きっかけは、彼が家族と共に、サハラ以南のある国からスイスへ戻る道中、アウレフを経由した時に始まる。家族の一人が具合が悪くなり、病院へ行ったのだが、そこでハンスさんは、病院に医師がいないことに驚いた。この時彼の心に、近い将来、この地の人々のために医者として戻って来よう、という考えが浮かんだ。彼はアウレフに戻ってくる途中、ガルダイアで一人の体に重い障害を負った子供を見つけ、その子の家族の了解を得て、アウレフまで一緒に連れて来た。そして、その子を身の回りの世話をし、躰けをし、学校にも行かせた。この少年は中々に知性の高い子で、後に正式にハンス夫妻の養子になった。ハンス医師がアウレフに住んだのは二年ほどの間だったが、その間この子は私の学校へ通った。医師一家が休暇でスイスへ戻る時には、毎回、医師はその途中ガルダイアへ寄って、その子を元の家族に合わせに連れて行った。少年は幸福のうちに成長し、医師一家がスイスに戻ってからは、そこの学校に通い、最終的にはスイス国籍を取得した。そして今では大きな会社の幹部社員として働いている。

一方、ハンス医師はアウレフ在任中、スイスの人道支援団体に働きかけ、アウレフの病院が医薬品の供給を受けられるようにしてくれた。物資を積んだ 5 トントラックが毎月アルジェからやってくるようになった。また、ハンス医師は、自分のランドローバーを使って、周辺のオアシスのチット (沙漠道路で 50 キロ)、アカブリ (同 50 キロ)、アウレフ・シュルファ (同 10 キロ)、ティモクテン (同 10 キロ) へも週一回巡回医療に出かけた。120 キロ離れたインベルベルにも月に一回行った。医師はどこへいっても骨身を惜しまず働いた。彼は貧しい人たちに食糧や衣類を分け与え、時には幾ばくかのお金を渡すこともあった。麻疹のワクチン接種も、医師がスイスの人道援助団体から資金援助を引き出すことによって始まった。ワクチンは余ると、アドラールやインサラーの病院へ提供された。彼は、休暇でスイスへ戻った時でさえ、恵まれない人々のことを一時も忘れず、スイスの善意の人々や NGO から古着や寄付金を集め、それらを携えてアウレフへ戻って来た。彼はアウレフの病院を離任した後も、機会あるごとに、不幸な境遇にある人々が必要としていると思われるものを送ってきてくれた。

彼の家族も医師の活動を手伝った。特に妹のジェルトリュード (Gertrude)

は、自分の休暇を割いて、アウレフからスイスへ治療を受けに行く子供たちの往復の付き添いをした。スイスのローザンヌに拠点を置く人道援助団体「人間の大地」は、途上国の障害のある子供をローザンヌの病院で受け入れ、治療や手術を受けさせる活動をしている。ハンス一家もその活動に関わっており、アウレフの病気の子供達にも、その機会を得られるようにしてくれたのだ。そのおかげで、この地の 17 歳以下の沢山の子供がスイスで、心臓手術や、障害のある四肢の治療を受ける機会を得た。ゲートルートも、子供を迎えにアウレフへ来るときは必ず、山ほどの古着や、病院へ提供する医薬品を持ってきた。それに、ハンス医師の娘スザンヌと、夫のマーカス・ビッテルも、父や伯母に負けないほどの善意の人だった。この夫婦も毎回、貧しい人々のために古着やその他の援助品を持って来てくれたが、特に障害のある子供たちの世話を熱心だった。このアウレフの住民の幸せのため尽力してくれた善意の一家をどう表現したらいいか、私は適切な言葉を選べる自信がないが、思い切って「守護天使の家族」と呼びたいと思う。ハンス医師がアウレフを離れてからも、私は「人間の大地」と関係を保ち、障害児たちをスイスの病院へ送り出す仕事を手伝い続けた。

アウレフでの生活の最後の年、ハンス医師の奥さんは、アイーシャ・ダウド (Aicha Daoud) という女の赤ん坊の面倒を見ていた。この子の母は、病院で出産したが難産で、お産の後すぐに亡くなった。夫妻はアウレフを引き揚げるに当たっては、この女の子を私の妹に託して行った。妹のゾーラは、ハンス一家の家で働いて家事を手伝っていた。ハンス一家は妹の所に毎月、この子の養育費を送って来た。彼ら天使の一家の数えきれない善行は、アウレフの住民の心に深く深く残った。その後も、ハンス一家の人々は皆、何度もアウレフに戻って来た。特に妹のゲートルートは、前述のようにスイスで治療をうける子供の往復に付き添いをしたので、アウレフに来た回数もはや数えきれない。ゲートルートが私の家に来ると、私の家族は彼女を王女様のように歓待し、彼女もまた自分の家にいるようにくつろいだ。ハンス医師の長女スザンヌも、後の夫で当時は婚約者だったマーカスと共に、私たちの家に何週間か滞在したことがある。私も一度、スイスのハンス医師の家と、娘のスザンヌの家にそれぞれ泊めてもらった。その時は私が王様のようにもてなされた。

アブベクルの治療

私の家では、さらに家族が二人増えた。1970 年 9 月 21 日にヘディージャ (Khédidjà) が生まれ (第六子、四女)、翌年 1971 年 10 月 28 日にはオマール (Omar) が生まれたのである (第七子、三男)。これで私たち夫婦の子供は、娘四人、息子三人の合計七人となった。私は引き続きベンバディス男子校の校

長の職にあったが、その傍ら、県議会へも出席しなければならなかったので、時々ウアルグラへ出張した。



ハジ氏一家：大人の右から二人目がハジ氏。左端がメサウダ夫人。日本人二人が映っているので、おそらく 1969 年の NHK 取材の時のものか。

第五子で次男のアブベクルは、病院のハンス医師にも診察してもらったが、確かに異常が認められるとのことだった。医師は、出産時に何か異常なことがなかったかと私に尋ねた。私は、息子は生まれた時体が青黒くなっていて、おそらく酸欠状態だったと思うこと、中々産声を上げなかったが、病院で生まれたのではないので、直後に医療的な処置は受けられなかったこと、等を説明した。医師は、赤ん坊がお腹から出て来てから 30 秒以上酸素が脳に供給されないと、後になって障害が現れる可能性が高いと言った。医師は、私に一度オラン大学付属病院の小児科医に診てもらうのがいいと言い、その病院の医者に当たった紹介状を書いてくれた。私は息子を連れてオランまではるばる出かけて行った。大学病院で診察に当たった医師は、私にフランスでの治療を薦めた。この子は神経障害を患っているが、まだ 6 歳なので、回復の望みがあると言うのだ。(訳注：アブベクルは 1967 年生まれ) また、この医師は、フランスのモンリュゾン (Montluçon) の近くのネリ・レ・バン (Néris les Bains) (訳注：オーベルニュ地方。ちょうどフランスの真ん中に位置する。) にあるリハビリ・センターへ入院させるのがいいとも言った。健康保険で、費用の一部を 6 か月間カバーできるとも説明された。

1974 年 2 月、私と息子のアブベクルは、入院のための服をいっぱい詰めたトランクを持ち、アウレフからフランスまで何千キロもの旅に旅立った。アルプス地方のアルベールヴィル (Albertville) に私の知り合いのトンプリエ

(Templier) 一家がいたので、フランスではまず彼らを頼っていくことにした。まず、アウレフからインサラーを経てエルゴレアまでは沙漠道路を行き、その先は幹線道路をガルダイア経由でアルジェまでいった。アルジェとマルセイユの間は飛行機に乗り、マルセイユからアルベールヴィルは電車で行った。優しいトンプリエ夫妻は私たちを快く迎えてくれた。トンプリエさんたちは、1967 年に彼らが友人たちと共に、何台もの車ではるばる陸路アウレフへやって来た時に知り合った。一行はかなりの大人数だったので、私は、ボーイスカウトのキャンプよろしく、彼らを何班かに分け、宿泊所を割り振った。また、ナツメヤシ農園やフォガラや、その他の観光名所を案内する時も、この班ごとに行動してもらった。私たちはトンプリエ家に一週間ほど滞在した。トンプリエ夫妻は二人とも学校の仕事で忙しかったに拘わらず、あれこれ心を砕いて私たちの世話を焼いてくれた。特にトンプリエ夫人は、息子用の荷物に足りないものがないかを心配し、自分の子供たちの服の中からあれこれ足してくれた。おかげで準備は万端に整った。ネリ・レ・バンまでは列車の旅だったが、出立の日、夫のダニエルが駅まで出送ってくれた。彼は、私たちが無事モンリュソンへ着けるかよほど心配だったらしく、道中での注意事項を、あれこれ細かく私に説明してくれた。

さて、話は少し戻るが、アウレフからアルジェへの途中、私は教育委員会に学校を休む許可をもらうために、道筋を離れてウアルグラへ立ち寄った。ウアルグラでは、許可書をもらう傍ら、ベンラハル (Benrahal) さんという知人に会いに行った。彼は親切で優しい人で、大きな建設会社を経営していた。かねてベンラハルさんから、モンリュソンに彼の義理の母が住んでいると聞いていたので、彼女の所に泊めてもらえないかと頼みに行ったのである。ベンラハルさんは快諾すると、義母宛ての手紙をしたためて持たせてくれた。モンリュソンの駅に着くと、私たちはタクシーで教えられた家へ行った。そこは住み心地のよさそうな家々の並ぶ地区で、件の家は大きな通りに面して建っていた。私はタクシーから荷物を降ろすと、家のドアをノックした。中から見るからに優しいような婦人が現れたので、私はほっとした。彼女は息子のアブベクールを見ると、まあ、と嬉しそうに言って、彼を抱き寄せ、チュッチュと何回も頬にキスをした。この義理のお母さんはスペイン人で、流暢なフランス語を話したが、時々スペイン語の巻き舌の発音が混じることがあった。彼女は見たところ 60 歳くらいで、独りで住んでいるらしかった。

家の中に招じ入れられた後、私はベンラハルさんが持たせてくれた手紙を差し出した。何が書かれてあるか、私は知らなかった。彼女は手紙を開けて読んだ。そして、こう訊いた。

「私の娘や婿は元気にしている？孫たちはどう？」

私は、ベンラハルさんの家族の方々のことは知らない、と答えた。

「まあ、じゃ、あなたはウアルグラに住んでるんじゃないの？てっきり、婿と一緒に働いている人なのかと思ったわ。」

私は、説明した。ベンラハルさんとは、彼が大きな住宅建設のプロジェクトのためにアウレフへ来た時に知り合ったこと。旅の途中で、学校の仕事を休む許可を取るためウアルグラへ寄ったこと。かねてから、モンリュソンに親戚があると聞いていたので、今回私たちを泊めてもらえないか聞いてほしいと頼んだこと。ベンラハルさんが快諾して手紙を書ってくれたこと、等々。義理のお母さんは、もう一度ゆっくりと手紙を読み直した。そして立ち上がると、私の傍へ来て、私をやさしく抱擁し「よく来ましたね」と言った。私は、彼女が私たちを心から受け入れてくれたのを感じ、喜びと感激で心の中がいっぱいになった。私は思った。もし、世界が、こうした人々ばかりだったら、不和も戦争もないのに、と。昼食の後、彼女は私たちを寝室に案内してくれた。部屋にはベッドが二つあった。

「この部屋は孫たちが使っていたのよ。彼らが居る時は、家中それはにぎやかだったの。あなたが、小さい子を連れてやってきたので、その時のことを思い出してしまったわ。今じゃ、年に一回夏休みに帰って来るだけなのよ。」

彼女の優しさがにじみ出るような言葉だった。

翌日の朝、まだ早い時間に、私たちは、この高貴で優しい婦人と別れ、タクシーで最終目的地に向かった。目指す病院までは、わずか 10 キロほどだった。病院の人たちは丁寧に対応してくれた。私たちの対応に出た係の人は、背の高い、優雅で温厚そうな若い女性だった。まず私は彼女に案内されて病院の施設を見て回り、次に医師に引き合わされた。医師は、オラン大学の附属病院が作ったカルテをチェックし、アブベクルを少し診察した。病院側と、アブベクルを入院させることで正式に話が決まった。また、私は 6 カ月に一回ここに帰って来て息子と面会すること、治療の経過は病院が書簡で毎月アウレフへ知らせることを約束した。私は息子を置いて病院を去る前に、正面玄関の前で息子の写真を撮った。親切な守衛の人が、私を車でモンリュソンの駅まで送ってくれた。

その日の正午頃、私はベンラハルさんのお義母さんの家に戻って来た。私の「善き神の家」の戸口まであと数歩というところで、近くを歩いていた一人のおばあさんが滑って倒れそうになった。私はとっさに、そのおばあさんに飛びついて体を支えた。この時の私は、猛禽類が獲物に飛びかかるのに似ていたと思う。彼女は右手に杖を持っていた。私は彼女に手を貸して、道の向こうに渡るのを助けた。大丈夫ですか、と私は訊いた。

「ええ、本当にありがとうね。もう一人で大丈夫だから、どうぞ行ってちょう

だい。」とおばあさんは応えた。

私が、お義母さんの家へ入る時、おばあさんは、まだ道の向こうから私のことを見ていた。家では、ベンラハルさんのお義母さんが、両手を広げて私を迎えた。どうだった、と聞かれたので、私は全て上手くいった、と答えた。

「ええ、ええ、きっとそうだと思っていましたよ。あなたの顔に、そうなる相が出ていましたもの。」

お義母さんは既に“tu”で話し始めていたが、私には遠慮があった。彼女は私にとっては、いつまでも敬意を払うべき人だったのだ。

「私はちょっと買い物に行ってくるけど、自分の家のつもりでゆっくりしてらっしゃいね。」と言い置いて、彼女は買い物かごを片手に出かけて行った。30 分ほどして彼女は戻ってくると、満面の笑顔で私に言った。

「ただいま、ドクター」

私が目を白黒していると、お母さんは、こう説明した。

「そこでお友達に会ったんだけど、彼女が転びそうになった時、黒人のドクターが助けてくれたって言うのよ。そのドクターは私の家へ入って行ったんですって。」

一体なんで、あのおばあさんは、私のことを医者だと思ったのかと、私は不思議に思った。

「最近なんだか、みんな他人のことには無関心になってきているのよね。お友達が転びそうになった時、助けに来てくれたのはその人だけだったんですって。それで、そういうことをしてくれる人は、きっとお医者さんに違いないって思ったらしいの。」